

紙にまとめ、それぞれ図.1, …と通し番号をつけ記す。カラー図版を希望する場合は、その旨を明記し、印画紙またはそれと同等な用紙に写真を焼き付ける、あるいはプリントすること。なお、図(写真)の製版代は原則として著者負担とする。また、プリント等行えない場合は画像ファイルによる提出も認める。画像ファイルの形式はJPG, PNG, PDF等汎用性の高い形式とする。

原稿受理後は、原則として1回の著者校正を行う。著者は、その責任においていっさいの内容を確認し、編集担当まで返送することとする。

別刷については、PDF版は無料で配布される。印刷版を希望する場合は、50部単位で表紙の有無を選択、別刷作成費と送料は著者負担。

掲載原稿(原図・電子媒体を含む)は著者からの申

し出がない限り、原則として返却しない。返却を希望する場合には投稿時に、切手を貼った返送用封筒を同封すること。

研究報告は初刷り以降は増刷しない。そのため、すべての初刷りが揃った際には、HHS及びHHS関係団体によりインターネット上に論文・報文・一例報告は公開されることを著者は心得ておくこと。

北海道爬虫両棲類研究会への原稿送付先及び、編集に関する連絡先は下記の通りである。

〒005-0021

北海道札幌市南区真駒内本町7-4-27

北海道爬虫両棲類研究会

徳田龍弘

E-mail : syomu@koke-koke.com

雑記

「雑記」は自由投稿として設けられました。報文や短報以外にも雑記の記事も募集しています。雑記はアピールしたいこと、情報交換したいこと、どこかに行ってきた、などなど自由な内容での投稿受け付けいたしますので、書きたいという方は事務局へご連絡下さい。

■メール: syomu@koke-koke.com (郵便の場合は背表紙の連絡先)

雑記目次

アズマヒキガエル対策で発生するヒキガエル死骸の処理が悩ましい	徳田龍弘	29-31p
うちのコ紹介「シマヘビ」	山口裕司	31-32p
釣りに行くとよく出会うニホンカナヘビ	坂田潤一	33p
ニホンマムシとヒガシニホントカゲの関係って?	坂田潤一	34p
書評 (Caudata 第4号・檜枝岐村文化財調査報告書 第1集 檜枝岐の山椒魚漁)		
	徳田龍弘・照井滋晴	35p

アズマヒキガエル対策で発生するヒキガエル死骸の処理が悩ましい 徳田龍弘

この文章は実験を行ったものの、結果が十分得られなかったお話なので、雑記として気楽に書きました。肩肘をはずらずに読んで下さい。

札幌市南区北ノ沢で発生している国内外来種のアズマヒキガエル(以後ヒキガエル)は北海道在来の生態系に影響をおよぼす可能性が高く、筆者が設立した団体(両爬の生態系をかんガエル・札幌市南区チーム:略称かんガエル)は2019年からヒキガエルが北ノ沢周辺で増えないように対策を行っている(徳田,2020)。気持

ちの良い話でなくて申し訳ないが、繁殖に集まる個体を中心に、捕獲して駆除を行っており、2019年には500匹余、2020年には3000匹余のヒキガエルを防除した。

防除によって出るヒキガエルの死骸をどうするかで、かんガエル内で色々意見を出し合いながら検討を進めているが、私達の現状の処理方法は焼却処分となっている。処理方法の検討は私達の中でなかなか難しい問題となっている。

まず生かしておけないのかという指摘がある。単純に数百～数千匹のカエルを人道的に飼育するのは難しいという点がある。分配して飼育するというアイデアも出たが、渡した人全員がしっかりとした飼育をしてくれるとは限らない。場合によっては渡した人がヒキガエルを捨ててしまい、さらなる分布拡大を引き起こす可能性がある。渡す人数が多くなればなるほど、このリスクは大きくなる。元の生息地に返すというアイデアもあったが、道内には様々な地域からヒキガエルが持ち込まれて増えている状況にあり、北海道のヒキガエルを本州に放すと、放した地域のヒキガエルの遺伝形質が攪乱されてしまう可能性が高いことや、すでに北海道でヒキガエルはいくつかの寄生虫感染が確認されており、この寄生虫が北海道に独特なものである場合は、本州に新たな寄生虫を撒いてしまうことにもなってしまいかもしれない。寄生虫に限らず、目に見えない病原体などは、全て調べるのも難しい。結局、北海道各地で増え始めたヒキガエルを本州に戻すのは、いろいろな面で影響が大きく、難しそうだ。これからも様々検討する必要はあると思うが、現状では生かして保存するのは難しいと考えている。また、在来両生類のエゾアカガエルやエゾサンショウウオは、ヒキガエル幼生や卵の捕食によって高確率で死亡する(Kazila&Kishida,2019;中川他,2018)ため、影響は小さくなく、在来両生類の保護という観点では駆除せずに放置するという事は、そもそも難しい。

カエルたちは、できる限りの安楽状態での殺処分を行っている。基本は冷凍による凍死である。両生類は冬眠の習性があることや、内温動物ではないので、緩やかな温度低下による凍死は苦痛が小さいものと考えている。また、事前にクローブ(丁字)の焼酎による抽出液で麻酔を行った上で冷凍することも試行している。

困ったことになるのが手元に残る大量の死骸である。せめて有効に死骸を活用したいと思うのが人情であり、私としても良い活用先があれば、利用したいと考えているが、しばしば外来種の利用を経済活動に絡めると、有効に活用できればできるほど「外来種がいなくなると儲からない、いなくなるとは困る」という図式になることがあり、手放して有効利用を歓迎できないところもある。あくまで有効活用するとしても、収入をあてにした活用は慎むのが良いのではないのかという考え方もある。

一部(100匹程度)は、著者の勤務先である専門学校で授業の解剖用に使用している。しかし、毒のある動物であることや、野生動物であることから寄生虫なども普

通におり、一般生徒に扱ってもらうには十分な注意が必要となっている。また、大学の研究用に供したりしてもいい。研究を通してヒキガエルの生態解明や、学生の知識になってくれればと思う。防除の対策に役立つ情報や、全く逆のことだが、ヒキガエルを保護するのに役立つ(本州ではいくつかの都府県でヒキガエルはレッドリストに掲載されている)情報が引き出せるかもしれない。

しかし大半は活用しきれず、冷凍庫に入れっぱなしにもできず、現状は焼却処分となっている。可哀想ではあるが、札幌市の焼却ごみ処分施設で処分していただいている。毒もあるので、食品や動物用の餌に用いるには不適であり、生活における利用もなかなか難しい。ヤマカガシがヒキガエルを好んで食べることが知られているが、ヤマカガシは毒蛇であり、特定動物に指定されているので、一般人が飼育することはできない。そこで、ヤマカガシを飼育している施設にヒキガエルの提供を相談したこともあったが、送料や保管場所など様々な問題があり、当方では実現が困難だった。

2020年に著者が個人的に、活用できないか試したこととして、①コンポストに入れて肥料にする②動物飼育用の餌動物に食べさせて処分する、を行ってみた。

①では冷凍された成体の死骸3体を、10リットルサイズのバケツ型コンポストに、刈り取った雑草とともに投入した。ミシシippアカミミガメの駆除死骸を堆肥化する取り組みも試みられており(西堀,2017)、期待したいところではある。5月中旬に投入し、ほぼ土の状態になったのが9月はじめであった。温度条件や、住宅地での試行だったため、ニオイが近所迷惑にならないよう小規模で行ったのも分解の遅延につながったものと思われる。実施してみてもの手応えとしては、いまひとつ。思った以上に「土」になって驚いたが、3匹処理するのに10リットルの容量がいるのと、3ヶ月かかる。また、もう一つ大きな問題がある。ヒキガエルから出来た土を肥料として使えるのか、ということ。少なくとも、野菜などを作るのに、この肥料を使うには抵抗は大きいと思う。毒は分解されているのか?これで作った野菜を食べてもいいのか?という大きな問題もある。毒が残ってるのかどうかを調べるのは、個人の活動では限界で、ここまでとなった。お花(食べないもの)の肥料には使えるかもしれない。毒という点では別の心配もある。分解されていない場合、野外で使っているものかどうか。本州ではヒキガエルたちも普通に死んで土になっているわけだから、全体的には支障がないだろうとも思うのだが、「北海道の土壤生物」に影響がないのかどうか

の確証が持てない。目に見えない生物まで考えると何もできなくなるが…。

まず、毒成分が微生物分解されるのか、高温処理なら安心なのか、このへんも疑問は残っている。問題なく微生物分解されるのであれば、埋却も有効な処理法になるだろう。

②では、解剖を行ったアズマヒキガエルの前肢、後肢、耳腺、肝臓を、ゴミムシダマシ科幼虫に与えた。この幼虫は一般的にミルワーム (Mealworm) と呼ばれ、肉食両生類や爬虫類の餌として用いられる一方、動物の骨格標本を作成する際に、骨についた肉を食べさせてきれいにするような用いられ方もすることがある。ミルワームは紙コップに3匹ずつ入れ、そこに各臓器と、パスタ (7mmスパゲティ) 1本を細かく折ったもの、フスマの粉と一緒に入れ、5日間放置した。結果として、ミルワームはすべての臓器を「かじった」。好んで食べる場合はなくなるまで食べ尽くすが、ヒキガエルの臓器等は食べることはできるが好まなかったのかもしれない。そして、興味深かったのが耳腺 (毒の塊) をかじったミルワームが死ななかつたことだ。昆虫によってはヒキガエル毒によって死亡をする例 (ゲンゴロウモドキ幼虫がアズマヒキガエル幼生を食べて死亡、成虫は生存) があるが (高橋、私信)、ミルワームに関しては耐性があるのかもしれない。しかし、食べ尽くしてくれない。かじるだけなので、死骸の処分にはこれも用いるには難しいと思われた。

このほか、情報クリップとして、2019年放送のUHBみんなのテレビ (夕方のニュース番組) の特集では、深川市の深川ひきがえるバスターズから提供されたアズマヒキガエルを救心製薬 (株) の研究員が、成分を持ち帰って調べるといふ様子が放送されていた。求心はどうき、息切れ、気つけへの効能を謳う第2類医薬品で、成分の一部に蟾酥 (せんそ) が含まれる。蟾酥はアジアヒキガエルやヘリグロヒキガエルの耳腺分泌物を乾燥させたものとされている。アズマヒキガエルの耳腺分泌物が果たして求心に使えるのかどうか、気になりますね。(ヒキガエルの毒は毒物なので、みなさんが個人的に食べたり飲んだりするのは控えてください)

良い落とし所に到達できなかった実験等だったが、せつかく調べた結果を眠らせておくにはもったいないのかなと思ったので、雑記に書き出してみました。読んでくださっている皆さんからも、良い方法があれば、教えて頂けたら幸いです。

私信の情報を下さった高橋怜央氏に感謝申し上げます。

参 考

- Kazila&Kishida. 2019. Foraging traits of native predators determine their vulnerability to a toxic alien prey. *Freshwater Biology* 64 (1):56-70.
- 中川大希・上代紗央・山岸右京・山舖直子. 2018. アズマヒキガエル卵組に含まれる毒成分のエゾアカガエル幼生に及ぶ影響. 北海道爬虫両棲類研究報告Vol.005:31-36.
- 西堀智子. 2017. 地域で取り組むアカミミガメ防除～捕獲から死体の有効利用まで～. 共生のひろば12:139-142.
- 徳田龍弘. 2020. 北海道の国内外来種アズマヒキガエルの在来生態系への影響と防除対策および啓発活動. 日本爬虫両棲類学会報2020 (2):194-201.

うちのご紹介 北海道爬虫両棲類研究会会員 山口裕司

今までフィールドでしか触れ合うことのなかったへび。今年初めて立て続けに3匹、飼うことになりました。全てシマヘビ (*Elaphe quadrivirgata*) です。想像以上に魅了され、ちょっと振り回され、かなり癒されている日々です。



①シマヘビ (黒化型)

産地：北海道上川郡東川町忠別川

捕獲場所：河原の石上

捕獲日：2020年8月1日

推定年齢：1歳

性別：雌 (推定)

全長：45cm (2020年11月日現在)

特徴・性格：下顎部だけ少し白いカラスヘビでしたが、成長につれ白さが広がり、顔周辺にちいさな白斑が見られ

32 うちのこ紹介

るようになってきました。シマヘビ、特にカラスヘビは気性が荒いという印象をもっていたのですが、この個体は温厚で飼育当初からほとんどかみつくとか威嚇するということなく、あっけらかんとした感じ。行動は大胆で、大食い。うちに来た当初は幼蛇の雰囲気満載でしたが、カエルやカナヘビをたくさん食べてすくすく大きくなり、最近では凛々しさも増して顔つきが大人っぽくなってきました。シマヘビは神経質と聞いていたので飼育は難しいと思っていましたが、餌付きがなんせよく、うちに来て最初の餌にあげたカエルも瞬殺で捕え、常に気持ちよいほどの食べっぷりを見せてくれます。ハンドリングも落ち着いてやらせてくれ、嫌がることも殆どありません。これまでびっくりした時に2.3回かじる素振りを見せましたが、最近は本当によく慣れて物怖じしなくなりました。ケージの外に出たくて出たくて、フタを一生懸命鼻で押す愛らしい行動を見せてくれます。大きめのカエルを与えた時は食べられなくて自信を喪失している様子を醸し出したり、大きすぎて食べられないカエルをうらめしそうに舐めてみたり、飼い主の主観での捉え方もありますが、面白い行動で笑わせてくれます。

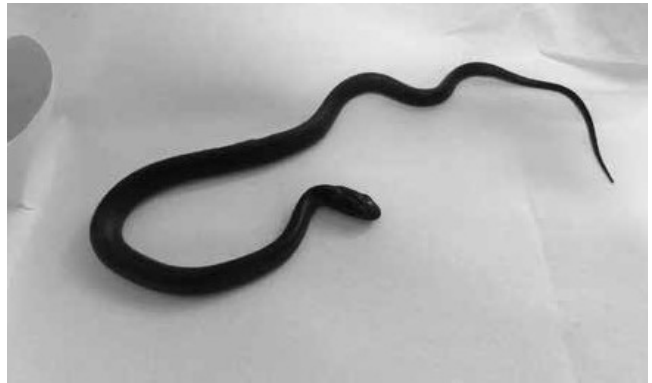


②シマヘビ（ノーマル）

産地：北海道雨竜郡秩父別町雨竜川
捕獲場所：樋門付近の護岸ブロック上
捕獲日：2020年9月26日
全長：30cm（2020年11月日現在）
推定年齢：0歳
性別：雌（推定）

特徴・性格：シマヘビ幼蛇特有の横縞があります。先述の黒化型を先に飼育していましたが、通常シマヘビ幼蛇の横縞の消失はいつ頃になるのか等、勉強になると思ったことと幼蛇で小さくて可愛かったのが飼いはじめました。性格は臆病の塊。当初は、手が目の前になると怖いみたいで、ハンドリングもパニックに陥るときがありまし

たが、最近はいよいよ慣れてきたような気がします。無理をさせないで徐々に慣れていってもらえたらと願っています。餌も最初しばらく食べなかったのですが、やっと食べるようになり、体に対してちょっと大きいかなど思えるカエルも頑張っている姿はとても愛らしいです。最近尾の下部付近の横縞がうすくなってきました。怖がりなところも含めて守ってあげたくるような、味のあるしみじみした可愛さに日々とても癒されています。



③シマヘビ（黒化型）

産地：北海道旭川市石狩川（神居古潭付近）
捕獲場所：旧神居古潭駅の歩廊付近
捕獲日：2020年10月2日
全長：30cm（2020年11月日現在）
推定年齢：0歳
性別：雌（推定）

特徴・性格：すでに上記のシマヘビ2匹いるというのに、可愛さにやられてしまい飼うことになりました。見た目は下顎部に少し白さはあるものの、先住のカラスヘビより少なめでほぼ真っ黒。漆黒でピカピカの鱗に黒々とした大きな瞳の美人？（美蛇）さんです。越冬という荒波を乗り越えたと思われる先住カラスヘビとは違って、今年生まれの赤ちゃんほやほやでびっくりしやすく弱々しい面もありますが、小さくて艶々で正統派(?)の可愛さがあります（と飼い主は思っています）。元気な時はずっと動いているのですが、基本まどろみがちでトロンとしている印象。しかしそのノッカリとした雰囲気に騙されてはいけません。何度か脱走され、ヤキモキさせられています。普段大人しいですが怒るとクワッとなってかじります。ハンドリングも嫌な時はイヤッとなって暴れます。また、餌もまずまず食べてくれますが、他の2匹と違い、カエルはほとんど食べてくれず、カナヘビとトカゲしか食べてくれません。どうやら、出生地にはトカゲ類が多かったのが起因しているのかも…。これからもその美しさと可愛らしさに寄り添っていかれたらと思っています。

釣りに行くときよく出会うニホンカナヘビ 北海道爬虫両棲類研究会会員 坂田潤一

仕事柄年間80~120日ほど北海道内の川や止水を中心としたフィールドを釣り歩いています。その際、魚以外に色々ないきものたちと出会います。会いたくないものもありますが（ヒグマは釣りの最中は会いたくないです）、たいていのいきものとの出会いはウェルカムです。エゾシカやキタキツネは常に会いますし、両生類は生活史の中で鰓呼吸のステージがあるため早春から初夏にかけて河原を歩いていると頻繁に出会います。また、秋になりキノコ狩りに山に入ると意外と水場がないような山の中腹でエゾアカガエルに出会うことが多く、さらに毎シーズン訪れる、標高750~780mくらいの谷に作られている治水・砂防ダムの冠水部では大きなエゾサンショウウオの上陸前の個体群に出会います（おそらく越冬幼生）。

では、爬虫類は?と考えると、いやー、実はこれが頻繁に出会ってしまいます。個人的にヘビが大の苦手なきものなのですが、ヘビだらけの河岸、何箇所も知っています。興味ある会員の方、ピンポイントでお教えできますよ! アオダイショウが良いですか? シマヘビ? 十勝管内の某所ではシマヘビの黒化型だらけなポイントもあります。カラスヘビはちょっとカッコイイかなとは思いますが（笑）。

本当に幼少期からヘビは苦手なのですが、トカゲたちはまったく平気です（笑）。5月、道北ヘイトウ釣りに出かけると笹原の中の倒木の上で日光浴をするコモチカナヘビを見かけたり、晩春の日高管内の林道脇の法面の草むらにかわいい小さな数個の卵、ニホンカナヘビのものを見つけるとなんか不思議と嬉しくなったりしている自分に気づいたりしています。

ヒガシニホントカゲを含めた北海道の在来トカゲたちの中で最も馴染み深いのは、やはりカナチョロ（ニホンカナヘビ）。初夏から夏の河岸では頻繁に見かけます。とくに、様似町の東側の幌満川では、行くたびに必ず数匹と出会います。草わらでも石原でも護岸箇所でも、場合によってはまるでこっちの方が釣れるよ〜と案内でもされているかのようにチョロ…チョロチョロとたまにこちらを覗ながら私の少し前を進んで行きます。ちょこまかと動いたりするのでシャッターチャンスが少ないのですが、それでもたまにその姿をうまく収めることができます。数点そのカットを紹介したいと思います。なんかヒガシニホントカゲと違って、コモチカナヘビ同様小さな恐竜感が強いと感じます（笑）。



曇り空の中、少しでも暖をとろうとしているのだろうか。
ニホンカナヘビ 2011.7.23 様似町幌満



絶対に小さな恐竜としか思えない（笑）。
ニホンカナヘビ 2011.7.23 様似町幌満



護岸のコンクリート上で日向ぼっこ中。尾が再生している。
ニホンカナヘビ 2014.9.7 様似町幌満



入渓点で誰かの視線を感じたら、その正体が彼だった。
ニホンカナヘビ 2015.6.7 新ひだか町三石上富沢

ニホンマムシとヒガシニホントカゲの関係って？

北海道爬虫両棲類研究会会員 坂田潤一

過去の編集後記や雑記でも触れていますが、私の行動範囲では近年本当にマムシが増えていると感じています。それも全道規模で、7月から8月、溪流釣りへ出かけた際、川原のガレ場や笹原周りを通過するときにはかなり慎重に歩いています。だからこそ視界に入ってしまうのかもしれませんが、やばい雰囲気箇所にはたいていいます。気持ちよさそうにとぐろをまいて日向ぼっこしているマムシ様が…。

気づかずに誤って踏んでしまうとか、必要以上に近づいてしまうとか、目をチラチラとよほど刺激しなければ向かってくることはないですが、なんかよくわかりません、あの顔が憎たらしいです(笑)。ジムグリなんかはヘビが苦手な私でも可愛いと感じますが、マムシを可愛いとは絶対に思えません。とにかく憎たらしいです(笑)。

そんなマムシ様ですが、札幌市内南区のマムシポイントでは気がつくとも高確率で同時にヒガシニホントカゲを観ます。それも至近距離で、もう確実に捕食されそうな距離と感じるほど。けれど、一度も襲われているシーンを目撃したことはありません。

マムシ様、そもそもそれほど大食漢ではないと思うけれど、食欲からではなく、反射で襲ったりはしないのだろうかという疑問を抱いてしまいます。魚釣りでは、魚の活性が低く口を使わない状況の場合、魚の反射を利用して針(ルアーなど)を咥えさせてしまう方法があるので、マムシ様もついつい反射で襲ってしまうということがありそうだけれど、このあたりに詳しい会員の方がおられましたら、ご教授いただければ幸いです。

もしかしたらヒガシニホントカゲは、マムシ様に襲われない秘技があるのかも知れないと思ったりもしますが、本当にその秘技が存在するのなら、是非ともその技も知りたいところです！

そもそもヒガシニホントカゲ、道北を除いた道内の広範囲に分布してはいるようですが、私の中では実際出会う確率はそれほど多くはありません。このポイント以外では年に数尾程度。けれど、ここではほぼ毎回訪れるたびにその姿を確認しています。そうです、マムシ様と一緒に。本当に不思議です。



ニホンマムシ



ヒガシニホントカゲ

[写真上2枚] 2020.7.20 札幌市南区



見辛いけれど、3匹のマムシがとぐろをまいています



ヒガシニホントカゲ

[写真上2枚] 2019.7.15 札幌市南区

書 評

両生類・爬虫類専門雑誌 Caudata 第4号

発行：有尾社
 発売日：2020/10
 価格：税込 1,800円
 サイズ：B5/84p

評者：徳田龍弘

北海道爬虫両棲類研究報告Vol.007の書評ではCaudata第3号を取り上げたが、今回発行された4号では日本のイモリを特集しており、日本産イモリ（アカハライモリ・シリケンイモリ・イボイモリ）について7本の記事が掲載されている。身近でペットショップで販売されているおなじみの生物ではあるが、その多様性や繁殖やそれに関するフェロモン、忌避行動や、個体数のモニタリング調査、越冬例など、幅広い視点からの内容が深く書かれている。内容が専門性の高いものは難しいと感じる読者もいるかも知れないが、いくつかの難しい単語を調べられれば十分に理解ができ、読み終えた時にはきっと「イモリってすごいな…」と思えるものとなっている。北海道にはイモリの仲間には生息していないが、当研究会の副会長・照井滋晴氏（NPO法人環境把握推進ネットワークPEG）による「インターネットオークションで売買される国産イモリ類」は野生動物であるイモリ達のネット販売の現状を書いており、今後の懸念がなされている。この記事を読んだあとにはまた違った目でイモリを見ることになるだろう。

特集の他にも、その他の有尾類、ワニ、ヘビなど両生類や爬虫類に関する記事が11本あり、イモリ以外でも楽しめる。当研究会で受け持っているコーナーの「北のハペだより」では、今回は照井氏が「釧路湿原周辺域で進む太陽光発電所の建設」を書いており、再生可能エネルギーとして期待される太陽光発電の環境に対する負荷がかかっていることや、このまま開発を進めることに疑問を投げかけている。

全編カラー版で写真やイラストも豊富で、かなり読み応えのある1冊になっている。

第5号の特集は、今回ほとんど登場のなかった無尾目（カエル目）のヒキガエルが特集される予定とのことです。

檜枝岐村文化財調査報告書 第1集
檜枝岐の山椒魚漁

発行：福島県檜枝岐村教育委員会
 発売日：2012/03
 サイズ：A4/62p

評者：照井 滋晴

初めにことわっておくが、本書は皆さんの近所の本屋で購入できる一般書ではない。福島県の南会津にある檜枝岐村の教育委員会が発行した報告書である。ではなぜここで紹介することにしたのかというと、単にとても興味深い文献で、皆さんも必ず興味を持ってくださるだろうと思ったからだ。

本書の内容は、タイトルの通り「サンショウウオ漁」についてである。多くの資料と聞き取り調査の結果をまとめ、檜枝岐村でのサンショウウオ漁の歴史や手法などについて事細かく書かれている。ここでいうサンショウウオというのは、北海道には分布しない流水性のハコネサンショウウオである。本書によると、檜枝岐村のサンショウウオ漁は、大正時代の終わり頃に栃木県の川俣から伝わったらしい。約100年前ではあるがそこまで古い文化ではない。

どのようにサンショウウオを捕獲するのかというと、ズダケを束ねてねじりながら作る「ズウ」という漁具（現在は、ビニールパイプやペットボトルに漁網や農業用のネットを使った「アミ」を用いるのが主流）を、沢に仕掛けるといふ。しかし、ただ仕掛ければよいわけではなく、場所が1mでもずれると獲れないこともあり、経験を積みながら会得していかなくてはいけないようだ。

獲られたサンショウウオは薬用（漢方薬）や食用として利用されている。もちろん「サンショウウオ漁」は過去の話ではなく、現在も続いている。檜枝岐村へ行けば、サンショウウオの燻製を購入できる。旅館では天ぷらなどが振舞われ、インスタ映え間違いなしのサンショウウオジェラートなるものも食べることができるという。気になった方はぜひインターネットで検索してみたい。評者はまだ現地に行く機会に恵まれていないが必ず味わいに行きたいと思っている。本書自体も村の民俗資料館で購入できるようだ（評者は直接購入していないため詳細は不明）。